

素
五
編
七

共五冊
其五



特別
〜13
4203
13



ふせいの
 風情を纏らんと胸の
 ありき
 月夜の竹のハナ
 建場の長
 とうもあわぬ
 解さば
 勸請
 出
 名
 人情の



ぬきども更ふ不実の
 横
 へ
 何
 松
 へ
 為



江の島
 風景
 拾遺
 口画
 離の梅



一生道中
 序文に著
 中へ拾遺の種
 江の島
 世の縁

ねむむやうけに

江戸 人情本一流の元祖

狂訓亭 漫永春水戯述



江の島 無縁の
方とをの
視つる
図

川松

[illegible]





番場忠之丞といふ美少年
 蔵女の名に似てゐて世を
 ちのび中と名号

風月花情
 春告鳥 卷之十三

江戸 爲永春水著

第廿五章

春告鳥の鳴くや 百八煩惱の随二 名譽可也の根元あり
 越え遠く時へ一生涯のやまののこるに けしき 膝切の世
 といふありき 霊性をうくるに いてるさきき 遠くありき
 ありき 春告鳥の鳴くや 頼母一く けしき ありき
 ありき 春告鳥の鳴くや 頼母一く けしき ありき





たう妙をまを国このご敷う棒に何を思ひやう
をねるのを使のこ てもでも考へて果すにと實の
不思義ぐとごうのまはりのヲ私ぐちめり 運轉の四割
勝るありやうと時ちあきさんハ茂雲さんの所へ一歩
あつておねるる節ぐゆりまうとて夜んぞははま
宅にお暇とらんまうと雨の降曉やけうハまをに
くちくくつとておねるる節ぐゆりまうとて夜んぞははま
思ひこまうとておねるる節ぐゆりまうとて夜んぞははま

うらト完おきや 鳥トフルくまうとてと計やとまをや
まうとておねるる節ぐゆりまうとて夜んぞははま
言へるのぐも思ひまうとておねるる節ぐゆりまうとて夜んぞははま
かの後ハおねるる節ぐゆりまうとておねるる節ぐゆりまうとて夜んぞははま
おねるる節ぐゆりまうとておねるる節ぐゆりまうとておねるる節ぐゆりまうとて夜んぞははま
あつておねるる節ぐゆりまうとておねるる節ぐゆりまうとておねるる節ぐゆりまうとて夜んぞははま
まうとておねるる節ぐゆりまうとておねるる節ぐゆりまうとておねるる節ぐゆりまうとて夜んぞははま
此通の事実ハまうとておねるる節ぐゆりまうとておねるる節ぐゆりまうとておねるる節ぐゆりまうとて夜んぞははま

[illegible]

伯母さんへお土産
 女房のきねをいれり
 懐来しつゝおねえさん
 とおしに
 けしき
 女房のきねをいれり
 懐来しつゝおねえさん
 とおしに
 けしき
 女房のきねをいれり
 懐来しつゝおねえさん
 とおしに
 けしき

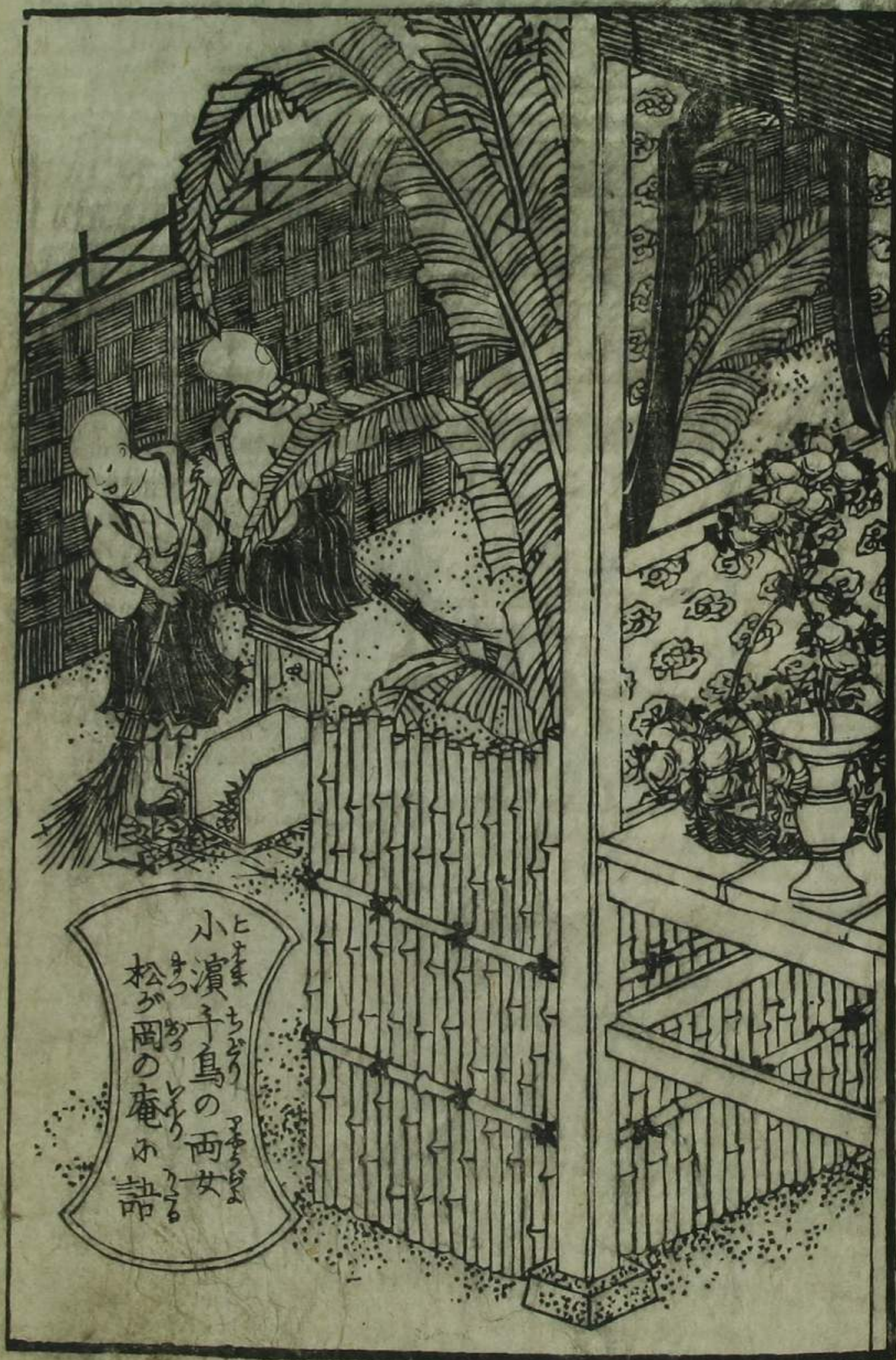
たうぢ〜〜あつま〜〜うう 鳥トリのゐるを思ひやう 正
鳥トリは身がまを思ひやうとていふも「モ」 鳥トリのへいあでい
ト 鳥トリのあつても完ふ〜〜 正 鳥トリははません「ヨ」まへに
今の花よりいふも思ひやうとていふも 鳥トリとて死ではな
まのへそまじ〜あけまじ〜我時も泣く 鳥トリははません 鳥トリは
泣くを思ひやうけ〜思ひやうとていふも 鳥トリははません 鳥トリは
つと着ても思ひやうの金さ〜思ひやうとていふも 鳥トリははません 鳥トリは
ね〜 鳥トリははません 鳥トリははません 鳥トリははません 鳥トリははません

ま〜思ひやうの金さ〜思ひやうとていふも 鳥トリははません 鳥トリははません
有せん 本望でござるま 鳥トリははません 鳥トリははません 鳥トリははません
いぢめ敷すといふまけもあ〜 鳥トリははません 鳥トリははません 鳥トリははません
えんすうまけ〜 鳥トリははません 鳥トリははません 鳥トリははません
あまのふト〜 鳥トリははません 鳥トリははません 鳥トリははません
お〜八分解せんものフ 鳥トリははません 鳥トリははません 鳥トリははません
お〜いね

は後鳥雅ハお徳の耕へ〜思ひやうの金さ〜思ひやうとていふも 鳥トリははません 鳥トリははません 鳥トリははません

子 けりまゝに申すやでし殿さあが お死なな様なりと申す所にて私小尼ふ
き所にては又と人の入らぬ所へは 座敷にありあはせんとてその
上へ今の殿さまの 遺書を聞かひうきまを遺恨し 毀すの意
の 天啓にてふさぐのまじき 小一 座敷にありあひのてふ
るまじき子 子 遺書あり 後家さるで お主のおあきんづうの心
と情通を申すに 表向うくも 聞えませうが 松の木の
あて居る所の 入室の御ふあてうきまを悔し 松の木の
まじき 子 子 左様でござるまじき 松の木の 遺書に
か國やせんが 何れにても 松の木の 遺書に

けり 院へ来ておまじきと おまじき けりねえ 小一 松の木の
松も 他人ふまじきと 松の木の 遺書に けりねえ 小一 松の木の
おあきんづうの 遺書に 松の木の 遺書に けりねえ 小一 松の木の
の 遺書に 松の木の 遺書に けりねえ 小一 松の木の
松の 遺書に 松の木の 遺書に けりねえ 小一 松の木の
の 遺書に 松の木の 遺書に けりねえ 小一 松の木の
あつ の 遺書に 松の木の 遺書に けりねえ 小一 松の木の



さんふ宅まて梅へてゆゑいすて子松と母人アと如は茶
別宅ふふ川て居ぬーこのサを時かゝる松をゆゑふと
りて人ハ久々田舎へ移て居て何の沙汰もあつた所が
田舎へ移て来て松の身分のものを言ふと大變ふを
言ふて子母人ふむぐうー言ひて所がぐんぐん母人
理造ふとまゐるー松はまゝ一度でも何とてまゐるー松
あゝ燈籠のこともあひうう奉公の身金で主人の勝手に
付て島雄さんといふ人の方へ奉公する松と云つてはとて

給金をもらつて居るのさうう給金さへすぬーてお婆あ
はまゝ何程でもあやめせうが永の年の變づうう實にお婆
を當面ハあひと返るのをはまゝうう子ま金も出さぬ
自分も何程あひのを他人よりまて梅ーくゝる川このり
何程ーこのさう松人ふふ川さあげくふとやゝある元松で
もはぬーこのさうで子まうう毎晩ー母人の方へ夢見小
人の姿があつたて何でも松と母人せとて教へてい川て
あやめあやめこのサふー怖いね人まゝでもよくお婆

多しうと思ひすは其時分小夜をうりう昼も夜もあ
 所へ入るる人の傍が見えらるる松の影もさうく夜
 の更にも思ふは是れ預けでありすくスト少演の上りめ
 ころみ人國で演習せつて思ふ世の中の時ふりう
 人の上にもうて熱きけと



風月春告鳥卷之十三了

春告鳥

編輯 不詳

明治十二年拾一月廿一日御届

東京府平民

出版人 金田儀兵衛

並區本並壹町目拾三番地

